

リフレクティング・プロセスの コミュニケーションに関する研究

三 澤 文 紀

キーワード：リフレクティング・プロセス、コミュニケーションの実証的研究、小集団コミュニケーション、家族療法

I. 問題と目的

1. リフレクティング・プロセスとは

リフレクティング・プロセス（「リフレクティング・チーム」とも呼ばれる）は、北ノルウェーのアンデルセン（Andersen, 1987; 1991）とその同僚が開発した方法である。

従来の多くの家族療法では、ワンウェイ・ミラーの背後にチームがいて、セラピスト（以下Th）とクライアント（以下Cl）らの面接過程を観察する。面接中、ThはClから見えないミラー背後に1～2度に行き、面接や介入の方針をチームと話し合い、面接室に戻ったThはその方針をもとに面接を進め、介入を行う。リフレクティング・プロセスでも、ワンウェイ・ミラーの背後にチームがいて、面接過程を観察する。しかし、面接中にThとチームがミラー背後で話し合うことはない。その代わりに、ThとClらがしばらく面接を行った後、チームメンバー同士が面接について話し合いを始め、それをThとClらが共にワンウェイ・ミラーの背後から観察するのである（これを「リフレクション」と呼ぶ）。リフレクションの後、Thがチームの話し合いについてClらにコメントを求めながら、さらに面接を続ける、という面接方法をとるのである。リフレクティング・プロセスは、ThとClの平等性を重視した方法であることや、複数の人々が参加する場であれば実践可能であることから注目を集め、広い場面で応用可能と考えられている（Andersen, 1995; 三澤・長谷川, 2007; 矢原・田代, 2008）。

2. リフレクティング・プロセスとトピックの産出

この方法は、従来の家族療法と大きく異なり、介入によって変化を導入しようとしていない。リフレクティング・プロセスでは、Thと会話したりリフレクションを聴いたりする中で、Cl自身が様々なコメントを取り入れ、考え、そこから新しいアイデアを得ることによって、Clが自ら変化の引き金を引くことが想定されている。特に、リフレクションの段階でチームが多くのトピックを話すことは、Clが新しいアイデアを獲得することに繋がると考えられ、とても重要である。これについて、リフレクティング・プロセス形式のコミュニケーションの方が、自由に話し合う形式のコミュニケーションよりもトピックが多く産出されることが実証されている（三澤, 2007）。

では、リフレクティング・プロセスのコミュニケーションのこういったメカニズムに

よって、トピック産出が多くなるのだろうか？これについて、リフレクティング・プロセスのこれまでの研究ではそのコミュニケーションをテーマとした研究が皆無に等しいため、メカニズムに関して明確なことが言えない。

3. トピック産出のメカニズム

このメカニズムに関しては、ケースについての情報を多く保有し、出された意見を取捨選択する立場にある「CIの存在」が鍵を握ると推測される。

CIやチームが誰とでも自由に話し合うことができる「自由検討形式」のコミュニケーションでは、当然のことながらCIが最も困っている事柄を話題としているため、話し合われている内容についてはCIが最もよく知っており、他の参加者よりも圧倒的に情報を多く持つ。その上、話し合われた意見やコメントを採用するかどうかは、CIが選択することになる。こういった立場にあるCIが話し合いに加わることによって、コミュニケーションのいくつかの面で抑制が起こると考えられる。まず、情報量の差があるため、CIに対する他の参加者からの質問が多くなり、それにCIが回答するといったコミュニケーションが多くなると予想される。同時に、情報を多く保有し、意見等の選択権を持つCIが参加しているため、参加者の質問や意見に対する発表者の回答が、そのトピックの「結論」として機能することが予想される。発言者の回答はいわば「鶴の一声」となり、その後には発表者以外の参加者が発表者の発言に補足したり、言い換えたりするような付け足す発言が、不可能ではないにしても難しくなると予想される（図1参照）。

これとは対照的に、リフレクティング・プロセスでは自由検討形式で生じるような抑制が起こらず、自由なコミュニケーションが展開されると予想される。まず、CIが話し合いに参加しないため、話し合いに参加するチームのメンバーは全員、先のThとCIが面接から聞き取った情報だけをほぼ均等に保有することになる。そのため、自由検討形式で生じたような、CIへの質問を中心としたコミュニケーションだけに限定されることはない。その上、もし誰かが不確かな情報を質問した場合でも、全員で確認しあったりコメントしあったりするなど、全員が発言可能であり、かつ決まったパターンに制限されないコミュニケーションが多くなると考えられる。このことから、同時発話のような発言の重なりが頻繁に起きやすいと予想される。また、意見等の選択権を持つ発表者が話し合いに参加していないために「鶴の一声」のような結論的な発言が少なく、ある意見等に対して、参加者同士が同意したり、補足したり、言い換えたりといった付け足す発言が比較的自由に行うことができると予想される（図1参照）。

以上の結果として、自由検討形式では参加者が誰とでも自由にコミュニケーションすることが難しくなると予想され、発言数やトピックが比較的抑制されるものと考えられる。逆に、リフレクティング・プロセス形式では参加者同士の自由なコミュニケーションが起きやすく、発言数やトピックが比較的多くなると考えられる。ただし、これらに関する実証研究がないため、今のところ推測の域を出ない。

4. 目的

それでは、上述の予想どおりのコミュニケーションが生起し、質問を中心としたコミュ

<自由検討形式>

<リフレクティング・プロセス形式>

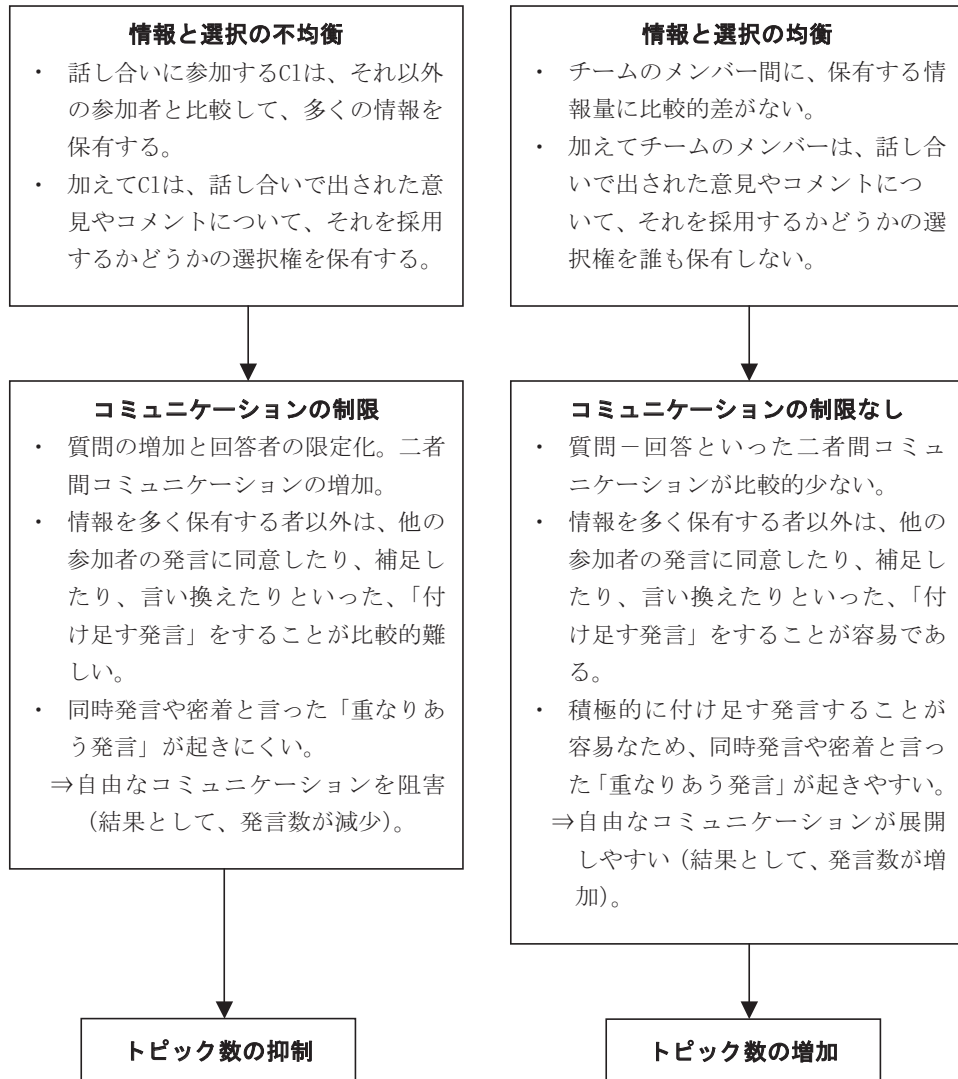


図1 両形式のモデル

コミュニケーションや、他者の発言と関連させた発言、重なる発言などについて、両条件で差が実際に見られるのであろうか？まずは、上述の予想と一致した特徴がみられなければ、予想の妥当性は失われる。そこで本研究では、以下の仮説を設定し、検証することを目的とした。

仮説：リフレクティング・プロセス形式の話し合いでは、自由検討形式のそれと比較し、C1（話題発表者）に対する質問を中心としたコミュニケーションが少なく、

参加者同士が互いの意見に付け足す発言や重なる発言が多くなる。

Ⅱ. 方法

1. 被験者

A大学の大学生・大学院生の知人同士3名1チームとする12チーム36名。

2. 準備

1) 2種類のロールプレイ台本の作成

実験前の準備として、2種類のロールプレイ台本A・Bを作成した。2種類作成の理由は、予備実験にて1種類の台本だけで実施した際、順序効果の影響が強く疑われ、かつ被験者にとっては途中から話し合い方が変化することになるため、混乱が報告されたためである。

両台本とも基本的構成、内容、台詞等は極めて類似させて作成された。共に、CI役がスクールカウンセラーとして勤務する学校において、特定の教師との間で問題が起きており、その対応に困ったCI役が知り合いのカウンセラー（以下、面接者役）に相談しているという場面を演じる。両者の違いは、台本Aではその教師が高圧的、Bではその教師が無気力という点だけである。これらは、実際にあったケース検討の逐語録を参考に作成されている。ロールプレイは、およそ15分程度で終わるように組み立てられている。

2) CI役の訓練

次に、実験の意図を知らない臨床心理学を学ぶ大学院生3名（男性1名、女性2名）を、CI役として起用し、訓練を行った。各ロールプレイのCI役がどのような学校に勤務しているか等の状況設定を詳細に確認し、演じる訓練を入念に行った。またCI役から相談を受ける面接者役は筆者が担当し、あらかじめ書かれた台詞どおりにCI役と面接をすることとした。なお、面接者役の台詞も、両ロールプレイで極めて類似するように作成されている。

3. 設定した実験条件

本研究では、リフレクティング・プロセスと比較するため、CI役とチームが直接コミュニケーションすることが可能な自由検討条件を設定し、アナログ研究（坂本，2000）の実験デザインに従って検討した。

●リフレクティング・プロセス条件（以下、リフレクティング条件）

リフレクティング・プロセス同様のチームとCI役が直接コミュニケーションを行わない条件。すなわち、被験者からなるチームが、面接場面のロールプレイを観察後、面接者役とCI役が見ている前で、CI役を交えずにチームだけで話し合いをした。チームがCI役と直接話すことがないため、チーム内（3名）で行われた会話に関して従属変数の測定を行った。

●自由検討条件

CI役とチームが直接会話する条件。ロールプレイを観察後、被験者からなるチームは、CI役を交えて話し合いをした。自由検討条件では、チーム3名とCI役1名（計4名）の話し合いに関して、従属変数を測定した。

4. 手続き

以下の手続きに従って進められた。尚、一般的なリフレクティング・プロセスの手順 (Andersen, 1991) を参考に、以下の手続き 1) ~ 3) の間、話し合いに参加しない場合でも、被験者、CI役、面接者役は共に面接室にいることとした。

- 1) 事前に被験者は、リフレクティング・プロセス (Andersen, 1991) に関して説明を受けた。特にリフレクション時の「ためらいがちな話し方をする」「否定的な話し方をしない」ことについては、詳しい説明を受けた。
- 2) 実験では最初に、被験者チームはロールプレイ A を観察した。その後、観察したことについて、リフレクティング条件に従って10分間話し合った。この様子はすべて録画された。
- 3) 続いて、被験者チームは別のロールプレイ B を観察した。その後、観察したことについて、自由検討条件に従って10分間話し合った。様子はすべて録画された。
〔以上の手続きで、ロールプレイ A と B、またリフレクティング条件と自由検討条件は、順序効果が出ないように、各組ごと順序や組み合わせを替えて実施した。〕
- 4) 録画されたチームのコミュニケーションについて、従属変数を測定した。

5. 従属変数

- (1) 質問と回答に関する項目：従属変数①~②

①質問

ここでは「質問」を、発言の区切りにおいて上昇イントネーションがみられ、かつ何らかの事実確認や情報提供を求めることを内容として含む発言、あるいは、「~について教えて下さい」「~を知りたいんですが」など、何らかの事実確認や情報提供を求めていることが明らかな内容の発言と定義した。

ただし、以下は質問としてカウントしない。

▶他者の質問を直接話法による引用した発言

例：Aさんは、「~ですか？」って言ってたね。

▶自分の発言の言葉遣いに関する疑問

例：先生との溝が深まる、ん、深まる？違う、溝が埋まるような行動だね。

▶若者言葉としての上昇イントネーション。

例：私的に？意見とか？特にない感じ？

これらの定義に基づいて質問を判定し、全発言数に占める比率を比較した。なお判定に際し、実験の意図を知らない大学生1名にも判定を依頼し、判定の一致率を求めた。

②最多回答者の回答数

発言の内容から、各質問に対する回答と見なされる発言を判定した。そして、各話し合いの中で質問に最も多く回答している参加者を同定し、その回答数をカウントし、全回答数に占める比率を比較した。なお判定に際し、実験の意図を知らない大学生1名にも判定を依頼し、判定の一致率を求めた。

- (2) 参加人数別トピック数に関する項目：従属変数③

③参加人数別トピック数

各トピックの中で、発言している人数をカウントした(のべ人数ではない)。それに基づき、各トピックを「1名のみ参加」、「2名参加」、「3名以上参加」のカテゴリーに分けてカウントした。

(3) 付け足す発言に関する項目：従属変数④～⑥

④自発的同意

自分以外の参加者の発言に対して、賛否を求められたことによるものではなく自発的に賛成、あるいは肯定的な理解を表している発言。「そうそう、そうだよ、確かに、ですね、だよ」等を含む発言が典型例ではあるが、これらを含んでも発言全体としては否定的な理解を意味している場合、「同意」とは見なさない。

ただし、質問の回答としての同意は、反応を求められての同意であり、自発的に付け足した発言としての同意と異なるため、本研究では除外した。また、相槌(うんうん、うーん、んん、あーあー、あっ、はいはい)は明確な同意と判定されない限り、基本的には除外した。

これらの定義に基づいて判定し、全発言数に占める比率を比較した。なお判定に際し、実験の意図を知らない大学生1名にも判定を依頼し、判定の一致率を求めた。

⑤補足

自分以外の参加者の発言に対して、その内容に情報を追加する発言。他者の発言が途中で終わって、それに情報を追加する場合も含む。

これらの定義に基づいて判定し、全発言数に占める比率を比較した。なお判定に際し、実験の意図を知らない大学生1名にも判定を依頼し、判定の一致率を求めた。

⑥言い換え

自分以外の参加者の発言に対して、内容はほぼ同じまま、表現を変更しての発言。これらの定義に基づいて判定し、全発言数に占める比率を比較した。なお判定に際し、実験の意図を知らない大学生1名にも判定を依頼し、判定の一致率を求めた。

(4) 重なる発言に関する項目：従属変数⑦～⑧

⑦同時発話

発言が重なっている状態。典型的には、2名以上が同時に発話し始めた状態が該当する。また、ある参加者の発言が続いている中で別の参加者が発言を始めたものの、最初の参加者が発言を続けた状態も該当する。

これらの定義に基づいて判定し、全発言数に占める比率を比較した。なお判定に際し、実験の意図を知らない大学生1名にも判定を依頼し、判定の一致率を求めた。

⑧密着

ある発言の終了と次の発言の開始が同時に起きている状態。典型的には、ある参加者の発言が続いている中で別の参加者が割り込んで発言をし、最初の参加者が発言を止めた場合がこれに当たる。他にも、ある参加者の発言の区切り部分で、間髪入れずに別の参加者が発言する場合もこれに当たる。社会学の相互行為分析(西阪, 1997)を参照に定義された。

この定義に基づいて判定し、全発言数に占める比率を比較した。なお判定に際し、実験の意図を知らない大学生1名にも判定を依頼し、判定の一致率を求めた。

Ⅲ. 結果

手続き上の誤りのあった2チームを除き、10チーム30名を分析対象とした。

従属変数の判定に関しては、ランダムに抜き出した連続する30発言×4組（各条件2組ずつ）=120発言について、実験者と実験の意図を知らない大学生1名との判定の一致率（ κ 係数）を求めた。その結果、総てにおいて高い一致率が得られた（質問 $\kappa = .658$, 回答 $\kappa = .766$, 自発的同意 $\kappa = .604$, 補足 $\kappa = .698$, 言い換え $\kappa = .647$, 同時発話 $\kappa = .907$, 密着 $\kappa = .813$ ）。そのため、以後の分析では実験者単独で判定を行った。

1. 質問と回答に関する項目：従属変数①～②

①質問

質問が全発言数に占める比率の結果を、表1に示す。

この変数に関して、正規性の検定（Shapiro-Wilk検定）を行ったところ、正規性が確認できなかった。そこで、Mann-WhitneyのU検定を実施した。その結果、自由検討条件で有意に多かった（ $U=21.5$, $z=-2.17$, $p<.05$ ）。

②最多回答者の回答数

最多回答者の回答数が全回答に占める比率の結果を、表1に示す。

この変数に関して、正規性の検定（Shapiro-Wilk検定）を行ったところ、正規性が確認できなかった。そこで、Mann-WhitneyのU検定を実施した。その結果、自由検討条件で有意に多かった（ $U=14$, $z=-2.74$, $p<.01$ ）。

また、自由検討条件の最多回答者は、総てのCI役であった。

従属変数①、②の結果から、自由検討条件では発表者以外が質問をし、CI役が回答するというパターンが比較的多くみられることが明らかとなった。

2. 参加人数別トピック数に関する項目：従属変数③

③参加人数別トピック数

参加人数別トピック数の結果を、表2に示す。

表 1 各条件における従属変数①～②, ④～⑧の統計値 (%)

	リフレクティング・プロセス条件				自由検討条件			
	Me	IQR	M	SD	Me	IQR	M	SD
①質問	12.2	11.75	14.2	6.81	31.7	14.57	29.39	8.44
②最多回答者の回答数	60.4	33.21	63.0	20.00	91.9	15.07	89.9	12.68
④同意	11.8	17.06	16.7	11.55	5.9	8.53	6.9	4.59
⑤補足	2.9	5.59	4.1	3.56	0	1.7	0.8	1.47
⑥言い換え	2.9	4.41	3.8	2.87	1.2	2.64	1.3	1.40
⑦同時発話	6.8	4.71	6.9	4.04	1.2	2.48	1.5	2.48
⑧密着	5.9	12.65	8.2	6.70	1.2	2.06	1.9	1.68

† $p<.10$; * $p<.05$; ** $p<.01$

表 2 参加人数別トピック数 (従属変数③)

		話者人数			合計
		1人	2人	3人以上	
一般条件	度 数	25	147	32	204
	期 待 度 数	31.68	128.40	43.93	204
	調整済み残差	-1.70	3.55	-2.67	
リフ条件	度 数	50	157	72	279
	期 待 度 数	43.32	175.60	60.07	279
	調整済み残差	1.70	-3.55	2.67	
合 計	度 数	75	304	104	483

この変数に関して χ^2 検定を行ったところ、有意差が見られた ($\chi^2_{(2)}=12.71, p<.01$)。その後の残差分析から、自由検討条件では「2名」が参加したトピック数が期待値より多く ($p<.01$)、「3名以上」は少ないという結果が得られた ($p<.01$)。これとは逆に、リフレクティング条件では、「2名」が参加したトピック数が期待値より少なく ($p<.01$)、「3名以上」が多いという結果が得られた ($p<.01$)。また、リフレクティング条件では、「1名」が有意に多い傾向も見られた ($p<.10$)。

なお、自由検討条件の各トピックでの最後の発言者になっている比率は、CIの平均が68.6%であり、その他の3名の参加者の合計比率31.4%の2倍以上であった。

従属変数③の結果から、自由検討条件では、1つのトピックが2名の会話で成り立っている場合が比較的多く、CIの発言後に次のトピックへと移行することが多いことが明らかとなった。それに対してリフレクティング条件では、1つのトピックが3名以上の会話で成り立っていることが比較的多いことが明らかとなった。また、リフレクティング条件では1名の発言に誰も反応することがなく次のトピックに移行することも比較的多い傾向が見られることも明らかになった。

3. 付け足す発言に関する項目：従属変数④～⑥

④自発的同意

自発的同意が全発言数に占める比率の結果を、表1に示す。

この変数に関して、正規性の検定 (Shapiro-Wilk検定) を行ったところ、正規性が確認できなかった。そこで、Mann-WhitneyのU検定を実施した。その結果、リフレクティング条件で有意に多かった ($U=18.5, z=-2.34, p<.05$)。

⑤補足

補足が全発言数に占める比率の結果を、表1に示す。

この変数に関して、正規性の検定 (Shapiro-Wilk検定) を行ったところ、正規性が確認できなかった。そこで、Mann-WhitneyのU検定を実施した。その結果、リフレクティング条件で有意に多かった ($U=16.5, z=-2.63, p<.01$)。

⑥言い換え

同意が前発言数に占める比率の結果を、表1に示す。

この変数に関して、正規性の検定(Shapiro-Wilk検定)を行ったところ、正規性が確認できなかった。そこで、Mann-WhitneyのU検定を実施した。その結果、リフレクティング条件で有意に多い傾向がみられた($U=24.5$, $z=-1.97$, $p<.10$)。

従属変数④～⑥の結果から、リフレクティング条件では自由検討条件と比較して、前の発言に対して次の発言者が発言するパターンが多く生じていることが明らかとなった。

4. 重なる発言に関する項目：従属変数⑦～⑧

⑦同時発話

同時発話が全発言数に占める比率の結果を、表1に示す。

この変数に関して、正規性の検定(Shapiro-Wilk検定)を行ったところ、正規性が確認できなかった。そこで、Mann-WhitneyのU検定を実施した。その結果、リフレクティング条件で有意に多かった($U=10.5$, $z=-3.03$, $p<.01$)。

⑧密着

密着が全発言数に占める比率の結果を、表1に示す。

この変数に関して、正規性の検定(Shapiro-Wilk検定)を行ったところ、正規性が確認できなかった。そこで、Mann-WhitneyのU検定を実施した。その結果、リフレクティング条件で有意に多かった($U=17$, $z=-2.52$, $p<.05$)。

従属変数⑦、⑧の結果から、リフレクティング条件では自由検討条件と比較して、重なる発言が多数あり、参加者が比較的自由的なタイミングで発言することが明らかとなった。

IV. 考 察

1. 自由検討形式のコミュニケーションの特徴

本研究の結果から、両形式のコミュニケーションにはそれぞれ仮説どおりの異なる特徴があることが明らかとなった。

自由検討形式のコミュニケーションにおいては、質問が頻繁になされ、それに対してC1が回答するパターンが多いことが、従属変数①、②の結果から明らかとなった。言い換えると、参加者の誰か1名が発表者が質問をし、それに発表者が答える、といったことが繰り返り起こっているということである。これは、ケースに関しての情報を圧倒的に多く保有する発表者が会話に加わることで、参加者がどうしても発表者に不明な点を尋ねてしまい、結果として「質問-回答」のパターンを繰り返すことになるためと考えられる。

また、参加人数別トピック数(従属変数③)の結果から、自由検討方式では、1つのトピックが2名の会話で構成されていることが多いことも明らかとなった。同時に、トピックの最終話者がC1である率が高いことも明らかとなった。これを先の「質問-回答」パターンの多さと併せて考えると、自由検討形式では参加者1名が質問や意見・提案等の発言を行い、それに対する発表者の発言が「結論」として機能してそのトピックが終了し、次のトピックに移行するパターンが多いことが理解できる。これは、C1が情報を多く保有することに加え、どの意見を採用するかについて選択する立場にある、つまり「選択権」

も保有していることによるものと考えられる。このようなパターン化された話し合いの中では、同時発話や密着といった重なる発言（従属変数⑦～⑧）も生じにくいと考えられる。

さらに、このようなCIの発言は、ケースを直接知る者としての情報提供的な発言や、どの意見が有効かを選択する者としての発言となるため、他の参加者がそれに同意したり、言い換えたり、補足したりといった発言（従属変数④～⑥）を、まったく不可能という訳ではないが、かなり行いにくくなる。

こうした自由検討形式のコミュニケーションでは、いわば「扇形コミュニケーション」が起きやすいと言える。これは、CIが中心となり、他の参加者がCIに対して質問、意見等を投げかけては発表者が答える、といったコミュニケーションである。そこでは、発表者以外の参加者同士が話し合うことは自然と少なくなる。このため、1つのトピックをめぐる参加者が互いにコメントし合うことがなく、細かくトピックが移行することは起きにくくなると考えられる。また、CIの発言が「結論」として機能するため、CIの発言によってそれ以上トピックが展開しにくくなる。こういったことから、自由検討形式ではトピックの産出が比較的抑制される傾向にあると考えられる。

誰とでも自由に話し合いができる自由検討形式ではあるが、あまり自由活発な話し合いが展開されているとは言えず、比較的決まったパターンの話し合いが展開してしまっている。特にルールのない自由な検討が許される条件で話し合いが一定のパターンになっていることは、とても逆説的である。

以上のことから、自由検討形式では制限された会話になりやすく、トピックが展開しにくくなると考えられる。

2. リフレクティング・プロセス形式のコミュニケーションの特徴

一方、リフレクティング・プロセス形式のコミュニケーションにおいては、「質問-回答」パターンが比較的少なく、1つのトピックが3名の発言から構成されていることが比較的多く、1名の発言から構成されているも多いという傾向が見られた。これらのことから、特定の人を中心とした「扇形コミュニケーション」ではなく、全員が自由に話し合いに参加できるコミュニケーションが生じているものと考えられる。自由に参加できるため、ある発言に対して全員が反応してトピックを形成することもあれば、誰も反応せずに別のトピックに移っていくこともあり得る。

こういった自由に参加可能なコミュニケーションが生起していることは、付け足す発言が多いことや、同時発話などの重なる発言が多いことから明らかである。他者の発言に対して、求められたわけではなく自発的に同意を示す発言をする、他者の発言内容を言い換える、他者の発言に内容を補足したりすることは、互いに自由に発言できているからこそ増加するものである。また、決まった発言パターンがなくて自由に話し合いに参加できるからこそ、同時に発言してしまったり、相手の発言に割り込んだりすることが起きやすくなる。

先の研究（三澤，2007）の結果では、リフレクティング・プロセス形式において、トピックレベル1のような比較的大きなトピックは自由検討形式と同程度、トピックレベル2のような比較的小きなトピックでは自由検討形式以上の数のトピックが見られており、

トピックレベル2の多さがリフレクティング・プロセス形式のトピック総数を多くしていることが明らかにされた。今回の結果を併せて考えると、リフレクティング・プロセス形式では自由に発言可能な状況が作られており、そこでは互いにコメントし合うことを自由に行うことができるため、小さなトピック（トピックレベル2）が産出されやすくなり、それがトピック全体の数を増やす結果になるというプロセスが浮かび上がってきた。

今回の結果を総合すると、リフレクティング・プロセス形式でのコミュニケーションが、自由検討形式のそれよりもパターン化されず、参加者が自由に発言できるという特徴を持つことを明示していると考えられる。

このような自由なパターンが生じる最大の要因は、リフレクティング・プロセス形式ではCIとチームが直接会話できず、チームだけで話し合いを進めるということにあると考えられる。情報と選択権を持つCIが話し合いに加わらないことにより、CIを中心とした「扇形のコミュニケーション」が起きない。代わりに、情報も選択権も同程度に保有するチームのメンバー同士が、互いの発言に反応し合いながら、自由に話し合いに参加するコミュニケーションが起きると考えられる。

3. 本研究の限界と残された課題

本研究から、リフレクティング・プロセス形式では、リフレクティング・プロセス形式でのコミュニケーションの方が、自由検討形式のそれよりもパターン化されず、参加者が自由に発言できることが示された。これらの特徴は、情報と選択権を持つ者がコミュニケーションに参加するか否かに起因することが強く推測されるものの、断言するには至らない。本研究ではリフレクティング・プロセスの形式と全員で自由に検討する形式を比較することを目的とし、各形式の状況に即した実験を行っているため、両条件で話し合いに参加する人数がどうしても異なってしまう。あるいは、リフレクティング条件の話し合いの際に「ためらいがちな話し方をする」などが特に求められる点でも、両条件では差がみられる。そのため、情報と選択権を持つ者の参加・不参加によって、本研究で見出されたようなコミュニケーションの特徴が実際に生じるかどうかを検証するためには、違いを統制した条件下で研究することが、今後期待される。

引用文献

- Andersen, T. 1987 The reflecting team. *Family Process*, 26, 415-428.
- Andersen, T. 1991 The reflecting team-dialogues and dialogues about the dialogues. New York: W. W. Norton. (鈴木浩二監訳 2001 リフレクティング・プロセス—会話における会話と会話。金剛出版)
- Andersen, T. 1995 Reflecting processes; acts of informing and forming: You can borrow my eyes, but you must not take them away from me! In Friedman, S. (Ed). *The reflecting team in action: Collaborative practice in family therapy*. New York: Guilford Press. pp. 11-37.
- 三澤文紀 2007 リフレクティング・プロセスに関する基礎研究：そこではどんな相互作用が起きているか？ 日本家族心理学会第24回大会プログラム・発表抄録集 pp.26-27.
- 三澤文紀・長谷川啓三 2007 家族療法を応用したケースコンサルテーション。村山正治・滝口俊子編 事例に学ぶスクールカウンセリングの実際。創元社 pp.213-225.
- 西阪仰 1997 相互行為分析という視点：文化と心の社会的記述。金子書房。

- 坂本真士 2000 アナログ研究. 下山晴彦・編著 臨床心理学研究の技法. 福村出版 pp.119-125.
矢原隆行・田代順 2008 ナラティブからコミュニケーションへ：リフレクティング・プロセスの実践. 弘文堂

The Study on The Communication of Reflecting Process

Fuminori Misawa

The purpose of this study was to investigate the characteristics of the communication in the REFLECTING PROCESS (RP). Previously, two role-playings scripts of counseling made, and three graduate students who didn't know the aim of this study were trained for the part of clients in these role-playing. And, 30 undergraduate students formed 10 teams (1 team consisted of 3 students). Each team individually observed one role-playing and discussed about it according to one of two experimental conditions, free communication condition (Fc) and RP communication condition (Rc). Rc restricted each team to talk with only team members, without client. Fc permitted each team to talk with client and themselves. After discussing of one role-playing, they observed the other role-playing and discussed about it according to the other experimental conditions. The results were as follow: Communication under the Rc was characterized by fewer question, frequent simultaneous utterances, and many additional utterances. These showed that team members under the Rc were able to communicate each other more freely than under the Fc. These characteristics of the communication in the RP were thought to result from talks without client who had a large amount of information and choice of ideas.

Keywords: REFLECTING PROCESS, Empirical Study of Communication, Communication in Small Group, Family Therapy